Ⅱ　キリスト教思想史の諸問題

＜前回＞ オリエンテーション

１．後期講義のポイント
　・宗教思想　→　思想史
　・現代人・現代世界における宗教の意味　→　宗教と科学の関係性
　・現代社会の倫理的諸問題：生命、環境

２．序論：宗教思想研究に向けて
　・「現代宗教学への招待」との関係：宗教現象を見る二つの視点、外からと内から。
　・思想は、生き方を決めているポリシーの問題（思考方法、発想法、見方）。
　・思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。→聖書に注目。

３．正典そして聖書学
　・正典（canon）：宗教的権威を持った文書、信仰生活の規範　→　閉じた聖典
　・聖書学：聖書も人間が歴史的文脈の中で生み出した文書と考え、一般の書物と同じ方法で分析的に研究する。
　・この講義の立場：聖書学を基礎にしつつ、正典として読まれてきた経緯に留意する。

第１講：聖書から見た科学技術

１　創造論の諸問題――創造と契約――

キリスト教（あるいは聖書の宗教）は、宇宙論的タイプの宗教と特徴付けることができる。それは、信仰、儀礼、歴史、民族、救済、罪・悪などの諸問題が、全体としての宇宙という文脈に位置付けられ、論じられるという点から確認できる。したがって、キリスト教思想において、全体としての宇宙の始まりと終わりは重要な位置を占めることになる。

こうした特徴は、キリスト教が古代イスラエル宗教の伝統から受け継いだとともに、古代地中海世界における宗教文化と折衝し討論することを可能にしたという点で――古代ギリシャ思想も宇宙論的タイプに属する――、キリスト教神学の成立にとって決定的な意義を有している。

Ｑ：「以上との対比で仏教はどのように特徴付けられるか？」
　　たとえば、仏教において、悪や不幸がどのように論じるかを考えよ。
　　心理学的タイプの宗教？

（１）　創造と善

１．第１創造物語：人間の固有性・独自性

創世記１章の創造物語は、伝統的に第１創造物語と言われるものであるが――聖書学的には、Ｐ資料（祭司資料）に分類される――、聖書における人間理解の基本を提示し

たものと解することができる。
　まず、注目すべきは、神の創造行為が次のような定型句にまとめられる点である。

　定型句：「神はＡあれと言われた。するとそのようになった。神はＡを見て良しとされた」　→　「＜言語行為・あれ＞→＜存在・ある＞→＜善・よい＞」

　第１創造物語では、人間が生きている世界について、まずその大枠（光、大空、海、陸）を示し、次第に人間の身近な存在まで順番に叙述が進められる――いわば、一つのパノラマを描くかのように――。そのポイントは、万物（天地）が神の言語行為によって（＝人間世界は言語的な構造を有する意味世界である）、存在するようになったことと、そしてこうして存在することになった存在者が神の観点から「よい」と判断されていることである。
　この存在するもの（＝被造物）は善であるとの判断は、「創造の善性」と呼ばれるものであるが、それは、さらに有意味性と解釈することができるであろう。すなわち、存在するものはそれぞれの固有性を有する意味ある存在者である、したがって、無意味なものは一つもないということである。

２．この存在するものは意味があるという議論は、ただちに疑問を生じさせる。つまり、その場合に、人間を苦しめ害を与える諸々のもの（たとえば、病原菌や害虫などなど）、とくに悪、罪、不幸と呼ばれる事態はどうなるのか、という問いである。これは、次回の講義で扱う問題であるが、聖書の宗教にとって、悪の問題は解決困難なアポリアである点に留意したい。
　存在するものが神の観点から見てすべて有意味であるとすれば､人間はそれに対して、これは無意味だと恣意的な判断を行うべきではないことになる｡わたしたちの社会では、人間の存在価値を通常その人との能力や業績で判断することが行われるが――極端な事例としては、ナチズムのユダヤ人虐殺や障害者の扱い方――、一見能力が劣ったと思われる人間に対しても、その人の存在を無意味だと言うことは許されない。また、自分の人生や生きていることについて無意味だと考え、たとえば自殺することも、人間には原理的に認められない。
　もし、能力が人間の存在意味を判断する唯一の尺度であるとするならば、高齢化社会に向かいつつある現代日本の将来はきわめて暗いと言わざるを得ない。「老い」においては、能力の低下は不可避的であり、能力の面からの価値判断に基づく限り、老いることはきわめて不幸なことだからである。もし、高齢化社会に希望があるとするならば、それには、価値判断の尺度を「能力・できる」から「存在・ある」へと転換することが求められるのではないか。現代日本においてキリスト教思想の意義の一つは、老いの意味の再考を促す点に認められるように思われる。

Ｑ：創造における神の「あれ」との言語行為を、言語行為論の観点から分析せよ。

３．人間存在の意味：神の像（imago Dei）　→　特殊な使命（支配？）
　では、人間固有の存在意味（＝他の生命体との相違・区別）とは、具体的にどのよう

な点に認められるのであろうか。それは、人間だけが神の「かたどって」創造されたと物語られる点に現れている。これはキリスト教思想の伝統的な用語でいえば、「神の像・似像」（Imago Dei、Image of God）の問題である――人間の固有性は神の像にある――。もちろん、問題は、では神の像とは何かということになる。これについて、ここで詳しく論じる余裕はないが、キリスト教が古代地中海世界に伝播し、その西半分を占めるラテン語世界に定着する過程で、古代ギリシャの人間理解と結びつくことによって、「神の像＝理性」という伝統が形成された。他の生命体に対する人間の固有性を「理性」（あるいは魂）に求めることは、それ自体納得できる面が感じられるものの、注意すべきは、ギリシャ的な（？）心身二元論の枠組みから、次のような対応関係が帰結したという点である――フェミニズムが批判する男性中心主義・ロゴス中心主義！――。

理性：身体＝男性：女性

理性が人間性の本質である（理性による身体・欲望のコントロール）

→　男性が女性を指導・支配する

第１創造物語で語るように、創世記この男性と女性の間の「支配」は、人間によって自然（他の生命体あるいは大地）に向けられるものと同質であって、ここから聖書の創造に対する環境論的な批判がなされることになる。なお、この問題については、第９講を参照いただきたい。

４．第２創造物語（Ｊ資料）：関係存在としての人間　→　耕す・名付ける（科学技術）

パートナーとの関わりにおける人間（社会性）、他の生命体との同質性・連帯性

聖書において創造が二つの物語において語られていることについては、古代のキリスト教父（たとえば、アウグスティヌス）以来様々な仕方で問題とされてきた。この思想史的展開に立ち入ることはできないが、ここでは、創世記２章における第２創造物語が、第１創造物語をいわば補完する形で、人間についてのもう一つの見方を提示している点に注目してみたい。

それは、第１創造物語が描く他の生命体との相違における人間の固有性・独自性に対して、他の生命体との関係性あるいは同質性における人間である。ここでは、人間は、土から作られ、土を耕し（＝土に仕え）、土に帰る存在として登場する。この土から土へという人間の生命の運動は、人間だけでなく、他の生命体にも共通のものであり、この点で、人間とすべての生命は同質的であり連続的につながっている――この点で現代の生物学が描く人間像とも合致する――。

（２）契約思想

５．「神－人間（共同体・民族→個人）」の関係＝契約関係、人格関係における神）

前期講義（第４講１）で論じたように、聖書の神は人格神と考えることが可能であるが、創造論との関わりから言えば、それは神と人間との関わりが契約関係として描かれていることに端的に表れている。この契約をめぐる思想は、旧約聖書の思想的核心を構成するものであり、創造論も契約思想に基づくものとして解釈することができる（フォン・ラートの学説）。以下、この点について説明を行ってみよう。

６．契約の構造：「約束－信頼」　→　責任性・違反への罰則・人格的な関係

アブラハムと神（主＝ヤハウェ）との契約（アブラハム契約）は、旧約聖書の契約思

想の原型と言えるものであるが、それは次のような構造になっている。

約束：子孫の数の増加と土地の取得
⟶
神　　アブラハム（民族の父→古代イスラエル民族）
⟵
信頼

まず、このアブラハム契約からわかるのは、神の約束の内容が示すように、古代イスラエル宗教は典型的な民族宗教であるということである。神は民族の繁栄を約束し、民族はこの神への信頼において統一される。神と人間との契約関係は、人間相互の関係の基本型であって、契約は古代イスラエルの基盤をなすと言わねばならない。

Q：古代イスラエル宗教や現代のユダヤ教と同様に、民族宗教に分類される日本の神道では、神と人間との関係は、どのように規定されているだろうか。それは、日本社会にどのような仕方で反映されているだろうか。

血縁・地縁という自然の絆

7．契約と創造との関係を理解する手掛かりは、契約を構成する「信頼」という要素である。わたしたちが他者と契約を結ぶ場合、その前提にあるのは、その他者への信頼であり、信頼が生じるには、それ相当の理由がなければならないだろう。そして、他者を信じる理由のかなりの部分を占めるのが、その人の過去のあり方（生き方、振る舞い方）、つまり、その人の経歴・履歴に他ならない。

これは、神との契約の場合も同様である。神の約束を信頼するには、神が約束を実現するに十分な力を有し、かつ誠実な存在であることが、過去に神が行った行為、人間との関わりにおいて確認されねばならない――ラートが「古いクレドー」と呼んだ、申命記26.5-9の記述（アブラハムからモーセ、ヨシュアに至る歴史を支配しイスラエル民族を導く神への信仰告白）――。こうした神の履歴を最大限に引き延ばし、神の偉大さと誠実さを示めそうとするときに、旧約聖書を創造物語から始めるという構想が生まれた。つまり、創造論は古いクレドーの「前面への拡張建築」と解することができるのである。

8．契約の起源・由来（創造論）と契約の結末・成就（終末論）

契約思想はその契約の根拠を時間的に遡及して辿ることによって創造論へと至る。また、契約は神の約束を構成要素として含むことからわかるように、契約は約束の実現を目ざす。約束はその実現が展望されるときにのみ、真の約束となる。この約束の成就・実現こそが、歴史の目的としての終末に他ならない。

（3）関連テキスト

＜創世記１章＞

1 初めに、神は天地を創造された。
2 地は混沌であって、闇が深遠の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。
3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

4 神は光を見て、良しとされた。
27　神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。
28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

＜創世記２章＞
15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。
16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。
17　ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」
18　主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」
19　主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。
20　人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。
21　主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。
22　そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、
23 人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」
24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。
25 人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

＜創世記１５章＞
1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」
5　主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」
6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。
17　日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。
18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、

＜参考文献＞
１．Ｇ・フォン・ラート　『旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ』日本基督教団出版局

２．関根正雄　『古代イスラエル思想家』講談社